

観光で地域住民を豊かにするまちづくり

京都府伊根町長

よしもと ひでき
吉本 秀樹氏

2021年4月現在、日本全国1718市町村のうち47%にあたる820の市町村が「過疎市町村」に設定されており、そのよう

—どのような経緯で町長になったのでしょうか。

な地域では人口減少・高齢化の進行や地域産業経済の停滞などに苦しんでいるところも多い。京都府伊根町は「過疎市町村」⁽¹⁾として認定されておりながら、舟屋を軸とした観光でも非常に注目されている自治体である。観光地としての整備にも尽力し、現在四期目を務める伊根町長の吉本秀樹氏にこれまで行ってきたまちづくりについてお話を伺った。

私は伊根町で生まれ育ったんですが、大学は同志社大学に行っていました。4回生の10月までは就職で町に戻ってくるつもりはなかったんです。でもたまたま見たNHKの大河ドラマの中で「生まれ育ったまちで生きていく」っていうようなセリフがあって、それ聞いて伊根町に戻ろうって思いました。

—その後町会議員になったんですね。

—家族ができたことで見えてきた問題点から町会議員になったというわけですね。町会議員から町長になったきっかけは何ですか。

民宿をやっていた当時、子どもは伊根町の保育園に通っていたんですけど、そこに園長がいなくて、例規集で調べてみたら担当課の課長が名前だけ兼務して実際はいないってことになっていました。それを役所の総務課長に言ってみたら「例規集を鵜呑みにしてもらっちゃ困ります」って返されたんです

—町会議員二期目に平成の大合併があつて、その荒波に伊根町も翻弄されました。私は財政も悪いこ

(1) 過疎地域自立促進特別措置法で人口減少率や財政力が規定を満たし、国が金銭的支援を行っている自治体のこと

の小さいまちが依存財源頼りでやっていても難しいですから合併には賛成でした。議会も合併特例債もあるから合併の方針を出していたんですけど、町民からの要請もあって住民投票をやることになりました。

私は住民投票でみんなが嫌なら合併もやめて苦しいなかでも自立してやっていけばいいじゃないのと思っていました。結果反対の方が多くて合併は頓挫しちゃいました。しかしうちら賛成派は町長も含めて何とかひっくり返そうって雰囲気になっていて、それが嫌で私は会派をやめました、もう住民投票を尊重するという事です。その後町長選が近づくと合併反対派から白羽の矢が立ち出馬することになりました。伊根町が伊根町であり続けるために俺はやるよと決めたんです。でも結局無投票で町長になりました。

「町長になって最初にどのようなことをしましたか。」

合併しちゃうと伊根町がなくなるところだったからそれを避けられたのはよかったです。財政はもう厳しくて、財政再建から始めました。住民懇談会を開いて伊根町の現状を説明して、「これはもう職員も私も住民の皆さんもお互い赤い血流さないといけない。色々迷惑かけることになるけど、申し訳ない。」と言いました。削れるところはとことん削って税金や公営料金も上げて、当然職員や私の給料もカットしました。そんな中でも多少思うところには予算つけたりしたけれど、とりあえず財政については一期目で目途が立ちました。

そして観光地化を目指し始めた

のもこの頃でした。消えてなくなりそうだったこの町がどう自立していくかですよ。それで基本になったのが、パラリンピックの父と言われるグットマン博士が残した言葉の、「失ったものを数えるのではなくして、残されたものを最大限活かしましょう」というものです。この言葉に出会った時私は手に汗握る思いがしました。その言葉が私にはね、「お前は金がない、人がいない、仕事がない、そういう泣きごとを言ってできない言い訳にしないか。そうじゃないだろうと。無いものねだりをするのではなくて自らの町にあるもの持てるものを最大限に活かすべきだろう。」そう聞こえました。

それ以来この言葉は座右の銘としてやっていきました。

それである日の新聞で「日本で最も美しい村」連合が特集されて

いました。日本の農山漁村の景観・文化を守りつつ、最も美しい村としての自立を目指すというコンセプトなんですけども、その記事の最後のくだりにね、「こんな記事を書いていると旅情をそそられる」って締めてあったんです。あつ、これだっと思ってたわけです。農林水産業っていう生産のシステムをしっかりと整えて六次産業化²させていく、そしてそれを観光とコラボさせていこうと思いました。

無いものねだりをしないんだからって何を生かすのって言ったら当然地域資源です。自然・景観・歴史・伝統文化そして地場産業、これを総合的に身の丈に合わせた形にプロデュースして世界に発信しようと思えました。その手立てが「日本で最も美しい村」連合だというわけで、ここから観光地化が始まっていきました。

(2) 一次産業としての農林漁業と、二次産業としての製造業、三次産業としての小売業等の事業との総合的かつ一体的な推進を図り、農山漁村の豊かな地域資源を活用した新たな付加価値を生み出す取組のこと。



伊根町の風景

—そこから具体的にはどのようなことをしていったんでしょうか。

伊根町は昔から映画やドラマの舞台になっていて、寅さんだとか釣りバカ日誌にも出てきたりします。大きかったのは平成5年のNHKの朝ドラの「ええによぼ」でした。ちょうど私が民宿を始めたころでしたが、聖地巡礼でたくさん観光客が来て民宿も大繁盛しました。年間の観光客が38万人まで行って、民宿も全部の舟屋230軒の10分の1くらいはあったんです。でもそのブームが去っていつて、私が町長になった時は民宿も四、五軒しかありませんでした。美しい村になって観光振興をするために何をアピールするかと言ったらやっぱりこの舟屋の景観だろうと思いました。それでこの景観をゾーニングして、ここを徹底的に磨き上げて発信していくことに決めて、宿や飲食店から駐車場、トイレも整備しました。

私のコンセプトとして230軒の舟屋が一つの大きなホテルのように連携していくというのがあります。民宿が減った理由として色々大変っていうのがあるんです。料理つくってさらにもてなすって言うのと女将やシェフがたくさん必要です。だから今やっているのは、舟屋を改築して一軒の舟屋に一室という形で一棟貸ししてしまつて飲食は近くのごはん屋さんで食べてもらうという形です。舟屋の管理者も「あなたがお貸しするのはロケーションと布団敷くだけです、なんならベッドだけならベッドメーカーキングだけです」って言われたらできるところもあつて今や27軒まで増えていきます。

駐車場は候補地が無くて苦戦しました。漁港の近くの漁業者用の土地で使われてなかったところがあつたんですけど、あそこを5年かかって駐車場に変えました。何でこんなにかかったかって言うと、水産庁から目的外使用って許可が下り

なかったんです。でもここを機械式の駐車場にして料金を取れば、地域住民と観光客、漁業者三方よしになると訴え続けて何とかできました。今は2か所ほど駐車場があつて、片方には80台ちよつと、もう片方にも40台近く停められます。公衆トイレもすぐには作れないから最初は借り上げトイレで、お寺さんにも協力してもらいました。

それで今もう一つやっているのは、寄付していただいた古民家に伊根浦の漁業者にはいつてもらい公設民営で飲食店をやるということです。漁業者でも農業者でも観光業に関わらない人たちは観光でこの町に十数億というお金が落ちるようになって納めできません。実際は来てくれるだけで生産物も消費されているんですけどね。分配の問題なんだと思います。だから観光は農林水産業とコラボしてかないといけません。漁業の株式会社を入れることでみんなに富が

分配できるような形にさらに近づくと思っています。

—様々なことをやってきたんですね。具体的に成果は現れましたか。

観光客数は私が町長になったとき年間24万人ほどだったのがコロナの前には34万人ほどになりました。一日一人お客さんが来て一年で365人のお客さんが来れば人口が一人増えたことになり、もし36万5千人が来たら1000人口が増えたことになります。これは大きいです。観光客数については年間50万人が目標だって総合計画では出しました。そのために何をしなきゃいけないかの仮説を立ててはつづすことを繰り返しました。でもそういうときにコロナが来たんです。

—コロナの影響で観光客も近くから来る人が多いという感じなんですか。

東京とか北海道、九州みたいな遠いところからも来ます。インバウンドだったら台湾とか中国が一番多かったです。舟屋って下は水がじゃぶじゃぶと浸かっているに浮いたように見えるんですけど、そこに住んでいる人間は自分の生活の場所だからそれがいいと思いません。でもそれが外の人には魅力的に映るんですよ、だから外から見た時の視点も大切にしたいです。

伊根町がどんなところかと言われたときに私はフランスのモンサンミッシェルとイタリアのヴェネツィアを足して2で割ったところと言ってアピールしてきました。世界と争うっていうのは恥ずかしく感じたけど、言っているうちにそれが現実になっていくんです。ミシュラングリーンガイドって

う訪れるべき町が紹介されているもので星二つをもらいました。あとは、世界で最も美しい湾クラブっていうのにも宮津湾・伊根湾が登録されているんですが、そこにモンサンミッシェル湾もあるんですよ。お友達になっちゃいました。

—観光客がたくさん来ることによつて現地住民の生活に支障が出ることもあると思いますが、その点に関してはどうですか。

観光客の中には舟屋が寺社仏閣と違って個人のおうちというのをいまひとつわかってない人もいます。より悪質なものとドローンを勝手に飛ばしたり、水上バイクを近くまで寄せてきたりっていう人もいて、特に観光業以外の方からは不満が出ます。だからこそ観光とも関わり合いを持つてもらって観光客が増えることのメリットの方を理解してもらうように努めています。

—町長のおかげもあつて観光は軌道に乗っているというところがわかりました。それで注目されたのをきっかけに移住する人もいたんじゃないですか。

たしかに子どもの数は増えましたが、私が町長になった時は伊根町で生まれた子供が一年で4人だったんですけど、増えていつて今は15人ほどいます。でも何か移住したら特典有りますよっていうのをやったわけではないです、そんなのすべての自治体がやりあつても疲弊するだけです。私たちは来る人に現状を説明して、その上で職も見つけて定住する人は応援しますけど、エサで釣るようなこととはしません。私のもう一つの座右の銘に「近き者喜ばば遠き者来たる」というのがあります。今ここに住んでいる人間がいいと思わないようなところには外から人も来ません。逆に地域住民が幸せに



吉本 秀樹
よしもと ひでき

1955年7月に京都府伊根町に生まれ、高校卒業まで同町で過ごす。
1978年に同志社大学を卒業後、漁師をしていた父親のもとで漁業に従事し、父親の死後は家族で民宿を経営する。
1998年に伊根町町会議員となって二期務めたのち、2006年に伊根町長就任。現在4期目。

過ぎていけば自然と外から人も来ます。例えば町民への子育て支援は力を入れていて、町立の小中学校は給食費やら学用品、修学旅行費まで無料で、大学行く人にも無利子で月額7万円貸しています。

「外からの人よりもまずは町民からってことなんです。」

そうです、今伊根町の人口は2000人ほどなんです。ここから大幅に増えていくとは考えられません。だからその2000人に満足してもらえないようにしたいです。先ほども言いましたが、伊根

町の強みである舟屋を観光と結びつけて、それと基幹産業や農林水産業をコラボさせていき、それで交流人口・関係人口を増やして地域の振興も図るといことです。

「伊根町のまちづくりの方向性についてはよくわかりました。日本全体に目を向けるとどうですか。」

コロナで都市部に人口が集中していることへの危うさが見えました。持続可能な日本社会を構築するには地方の農山漁村に重きを置いた分散型の低密度社会を作って

いかないといけないと思っています。私たちの出番です。過疎地の人口は日本のだいたい8%、100万人しかいないので、もしその人たちが消えてしまっても日本経済に何の影響もないように思えます。でも面積は60%あるんです。だからその1000万人がいなくなれば60%の国土が管理できなくなると、食料、水、エネルギー、癒し、すべからく提供しているところが荒廃するんです。これは自ずと堅固に見える都市の生活も破壊されるのは自明の理です。そのため過疎地に重きを置く政策も必要だし、そこに生きる人間も助けてやる必要もあります。もちろん過疎地に住む人も頑張る必要があつて、それが無いものねだりせずに自分たちの強み・個性を前面に押し出すということです。私も伊根町からその流れを作っていきたいです。

(聞き手：神代 凌)